

中国南朝仏教の行位解釈に関する一考察

―成実涅槃經を中心―

魏
藝

一、はじめに

中国南朝仏教における教学の形成と展開にはいまだ解明されていない問題が山積している¹。その一つが、諸經論に説かれる様々な修行階位をどのように理解するのか、という問題である。南朝仏教に関する従来の研究には、主に布施浩岳「一九七三」『涅槃經の研究』（前篇・後篇）、国書刊行会）、菅野博史「一九九六」『法華義記』（法雲説、大蔵出版）、同「二〇一二」『南北朝隋代の中国仏教思想研究』（大蔵出版）、船山徹「二〇一九a」『六朝隋唐仏教展開史』（法蔵館）・「二〇一九b」『仏教の聖者―史実と願望の記録』（臨川書店）などがある。このうち、行位解釈に関しては上掲した船山徹氏の研究が特に有名であり、ほかに青木隆「一九九二」などの研究がよく知られている²。とりわけ船山徹氏は『菩薩瓔珞本業經』（中国で成立）や『大般涅槃經集解』などを用いて、中国仏教特有の行位解釈（四十二位、あるいは五十二位）及びインド仏教における修行系統との相違を明らかにした上で、更に中国の天台学派や玄奘一派の行位説について考察している。

本稿では、菩薩行位の「十地義」に焦点をあて、羽二七「不知題仏經義記」（擬題）、『大般涅槃經集解』、『藏外地論宗文献集成』、『大乘四論玄義記』の内容を検討し、それらを踏まえて成実涅槃学派における行位解釈と地論学派、三論学派との関連を明らかにする。

二、羽二七一『不知題仏経義記』（擬題）などの基礎的情報

まずは本稿で取り扱う文献資料について簡単な説明を行いたい。

第一に杏雨書屋蔵敦煌文獻羽二七一『不知名題仏経義記』（『敦煌秘笈』影片集第四冊所収、以下『義記』）である。本資料（残存五卷）は、南朝文宣王蕭子良（四六〇―四九四）の主催で、永明年間（四八三―四八九）行われた講経記録であると推測されている。講経記録であるから、講師（答者）一人・問者数人が登場し、概ね講師が総述した後様々な問答が展開するという形が取られる。残存する部分に限られるが、講義で選択された論題は以下の通りである。

【義記第一】

講題・講師欠

〔生因・了因〕問者…冶城智順。

天安僧鍾法師解法身義

問者…天安僧表、中寺法安。

上定林僧柔法師解法身義

問者…靈味宝亮、冶城智秀、冶城智順、莊嚴玄趣、道林（寺？）、莊嚴法朗、莊嚴慧瀾。

靈基曇織法師解涅槃義

問者…天安僧鍾、中寺法安、冶城智順、道林僧。

南潤道祭法師解涅槃義

問者…南潤慧隆、天安僧鍾、靈基曇織、天安僧表、冶城智秀、冶城智順。

【義記第二】

冶城智順法師解三宝義

問者…莊嚴僧旻、莊嚴法靈（雲か）、靈味宝亮、冶城智秀。

天安僧鍾法師解一乘義

問者…南潤慧隆、靈基曇織、謝寺僧最。

南潤慧隆法師解一乘義

問者…天安僧鍾、靈基曇織。

中寺法安法師解十地義

問者…靈味宝亮、祇桓慧令、靈基光泰、天安智藏。

【義記第三】

中寺法安法師解四等義

問者…冶城智順、靈曜僧盛、冶城光泰。

祇桓慧令法師解四摂義 問者…靈曜僧盛、中寺法安、靈味宝亮。

上定林僧柔法師解淨土義 問者…道相法龍、治城智順、天安智藏、祇桓慧令、龍光慧生、治城光泰

白馬寺僧宗法師解淨土義 問者…南潤慧隆、中興僧鍾、謝寺僧最。

【義記第四】

天安僧鍾法師解金剛心義 問者…南潤慧隆、靈基曇織、天安僧表。

上定林僧柔法師解金剛心義 問者…常樂慧珍、治城智順、治城智秀、靈曜僧盛、靈曜慧令、治城光泰。

靈曜僧盛法師解六通義 問者…天安智藏、莊嚴慧瀾、治城智順、治城智秀。

上定林僧柔法師解二諦義 問者…安樂慧令、興皇道明、靈味宝亮、治城智秀、中寺興慶、瓦官僧口、治城光泰。

【義記第五】

天安僧表法師解四諦義 問者…天安僧鍾（以下欠）

治城智秀法師解四諦義（欠）

天安僧鍾法師解三乘同觀義（欠）

謝寺僧最法師解三乘同觀義（欠）

一見して明らかのように、講師・問者は共に「寺院名＋僧名」という形で明記されており、しかもそこには一般に「梁の三大法師」と称される智藏（開善智藏（四八五―五二二））、僧旻（莊嚴僧旻（四六七―五二七））が問者（波線部）として登場している。また、講義の題目を見ると、「法身義」「涅槃義」「十地義」「淨土義」「四諦義」などが確認でき、これらの論題が当時において重要な研究課題であったことが窺える。

ところで、『出三蔵記集』によると、斉永明七年（四八九）、文宣王蕭子良は五百余名の学僧を普弘寺に召集し、僧柔（四三―四九四）・慧次（四三四―四九〇）に『成実論』の講義を行わせ、同年十二月には『抄成実論』九卷を抄出させている。この『成実論』の講義を踏まえれば、『義記』の講義現場には講師・問者の他に、聴講者（在家の信仰者もいたと思われる）も相当数いたと思われるから、羽二七一『義記』における諸師（僧柔を含めて）の見解は、当時の仏教界でかなり共有されて

いたことが推測される。

第二に建元寺の法朗（生没年未詳）が編纂したとも考えられている『大般涅槃經集解』（現存七一巻、大正蔵三七所収）である。¹²これは、南朝代で現存している南本『大般涅槃經』（以下『涅槃經』）の唯一の注釈書として名高い。巻一の「皇帝為靈味寺釈宝亮法師製義疏序」¹³（五〇九年）の他に、僧宗（四三八―四九六）、法安（四五四―四九八）、宝亮（四四四―五〇九）など十師の序文が載録され、巻二より巻七一までは『涅槃經』の随文解釈となり、僧宗、法安、宝亮、法瑤（四〇〇―四七五）、¹⁴道慧（四五―四八一）、¹⁵智秀（？四三九―五〇二？）、¹⁶慧令（生没年未詳）、曇織（四三二―四九五）、¹⁷智藏などの人師（計十八名）の注釈が記録されている。彼らは全て涅槃學派の人師であり、別に涅槃師と呼ばれることもある。

ここで注目したいのは、『涅槃經集解』の内容と前掲の『義記』を比較対照することが出来るということである。すなわち、『涅槃經集解』では、巻五に「釈妙本見丈六」（法身解釈）、巻一五に「釈以四果配菩薩」「位釈三乘十地」（行位解釈）、巻三二に「釈二諦義」、巻四五に「広出是有三乘無三乘等事」、巻四八に「釈四諦義」「略釈仏性義」、巻四九に「釈大涅槃小涅槃義」（涅槃義）、巻五〇に「弁四量心」、巻五三に「論闡提有仏性義」、巻六五に「第十八釈或説四果人成仏不成仏」があるなど、百以上の釈題を抽出することが出来る（無論、これらは『涅槃經』を研鑽する課題）。これを『義記』と比較してみると、法身義・十地義・二諦義・三乘義・涅槃義など、共通の論題が窺える。そればかりか、『義記』と『大般涅槃經集解』の二書に共通して登場する人師は、法安、僧宗、宝亮、智秀、智藏、慧令、曇織の七名である。慧令と曇織は単独として伝記がないが、『高僧伝』における「釈僧鍾伝」では曇織に言及し、「釈僧宗伝」では慧令に言及している。したがって、慧令と曇織は僧宗と同時代の人物であると見なしてよいであろう。こう見れば、上掲した『義記』と『大般涅槃經集解』に記録された諸師の見解は、菩提流支・勒那摩提訳『十地經論』（五〇八―五一）や真諦（四九九―五六九）訳『撰大乘論』、『仏性論』（五四六以後訳出）などがいまだ中国に紹介されていなかった時期の教学であることに注意する必要がある。

第三に『藏外地論宗文献集成』と『大乘四論玄義記』である。前者は、青木隆氏や石井公成氏などによって、歴代の大蔵經に入蔵されていない地論學派の文献を整理した文献集であり、地論教學が窺える貴重な資料である。該文献は一次資料として、新たな地論教學研究の進展を促す一方で、これらの地論研究を通して、中国仏教教學史における転換期ともいえるべき南北朝、隋唐に至るまでの多くの空白が埋められることができるであろう。¹⁸

後者は三論学派の文献であり、吉蔵とほぼ同時代の慧均（生没年不詳）によって撰述されたと考えられており、もちろん三論教学が示唆されている貴重な資料である。該文献の資料価値について、崔鉉植氏「二〇〇九」は、次のように評価している。³⁰

三論学の概論書としては最も豊富な内容を盛り込んでいるばかりではなく、当時三論学とは競い合う関係にあった地論学、撰論学、成実学、毘曇学などの理論に対しても具体的な記述をしつつ、これら学派と三論学派の思想的な相違を明確している。この点において、本文献は、三論学派のみならず他の学派の理論を理解する上でも非常に重要な文献である。

更に崔鉉植氏「二〇〇九」、伊藤隆寿「二〇一八」により、当該文献が百濟僧慧均（中国に留学した経歴がある）によって撰述されたことがほぼ確実となり、また、日本で伝写・保存されていたことが指摘されている。要するに、中国・日本・朝鮮半島における仏教交流の一端を窺える研究資料であるといえよう。

三、法安の「十地義」について

周知の通り、南朝代の仏教に関する文献資料はあまり残されていない。しかし、近年、敦煌文献が公開されたことよって、南朝仏教の思想が徐々にではあるが解明されつつある。既に先行研究でも指摘があるように、³¹大乘菩薩の十地思想は、十住をはじめ、五忍、法身、頓悟などの議論と密接に関わっており、当時の中国人仏教者が仏果に至る過程をどのように考えていたのかを知るためにも極めて重要なテーマである。

本項では、宋・斉時代に活躍した法安が講述した「十地義」について考察する。以下、「南朝における三惑論」と「法安の十地義」という二つの小節に分けて論述を試みる。

（一）南朝における三惑論

ここでは、先行研究でほとんど言及されていない煩惱論を取り上げる。なぜならば、煩惱を対治することは、修行階位（十地）と密接に結び付けているからである。『義記』「中寺法安法師解十地義」の冒頭部分で法安は次のように述べている。

夫設名樹教厭趣不同、所其以広嘆極果、為生欣樂之情。是故備陳万行、為示趣果方法。十地者、即万行之總稱也。行者始終凡有三時。自住前心謂之凡夫。凡夫有二種。初十心以前為外凡夫。第廿心為種性地。第卅心為解行地。此二地通為内凡夫也。登住以上是為聖人。智周德備謂之極果。就登聖上未至極果以還、制為十地。地以能生長為義。此十階之行、能生極果故、故以言之。

（羽二七一・一〇）

要点は以下の三点である。一つ目は、行者の修行段階を外凡夫・内凡夫・聖人という三つに分けていることである。なお、極果は仏果であるため、行者の三時には含まれない。二つ目は、初めの「十心」以前が外凡夫に対応し、第二種の「十心」と第三種の「十心」は共に内凡夫に対応する点である。しかも第二と第三の「十心」が種性地と解行地に相当している。これは南朝代の仏教における行位解釈に用いる「三十心」（三種の十心）という概念である。²²三つ目は、登住（初地）以上が聖人となり、仏果に至るまでの修行階位は十地（十段階）とされる点である。

ただし、素朴な疑問も残る。そもそも三十心とは具体的にどのような十心を指すのか、羽二七一『義記』の記録からは判断がつかないのである。加えて、種性地と解行地と三十心との関連はどの經典を根拠とするのかということも不明である。既に船山徹氏の研究にもあるように、外凡夫と内凡夫は『成実論』を根拠とする用語であり、「三十心」も『菩薩瓔珞本業經』を根拠とするようである。『菩薩瓔珞本業經』は四八〇〜五〇〇頃の約二十年間で中国南朝で編纂された經典である。法安の没年が四九八年であるため、法安の講義は四九八年以前でなされたと考えられている。たとえこの講義は永明年間（四八三〜四九八）行われた講義であるという案を採用しても、法安が『菩薩瓔珞本業經』を参照できたのかどうかについては断言できないものの、しかし法安の行位解釈に関しては、三十心・外凡夫・内凡夫という概念が当たり前のように用いられていることは確実である。

続いて、法安は次のように述べている。

夫声聞心局、憚於遠涉、故為立四果以示其心息。大士清曠、不惧長途、故不為制果。直弁因相、地由因也。不言十因而言十地者、以外地体相广大、能生力曠普載衆生。為含識所依。内地亦然。總万行為体、是其广大。能生極果、是其力強。兼濟群品、是其能載。因則不然故、不言之也。有十階故、言有十地。

(羽二七一・一〇)

ここでは、声聞四果と菩薩十地が説かれている。四果と十地との最も大きな違いは、十地の菩薩は仏果に至ることができて、同時に衆生をあまねく救済することができるということである。このような十地を説明した後、法安は以下のような煩惱論を述べている。

行者之感、大判有三。一者最重、能潤惡業、受三途之生、即經論所謂「見諦惑」也。二者次重、能潤善業、能受人天之生、即經論所謂「思惟惑」也。三者最輕、能潤變易之生、即『勝鬘經』謂う所の「無明住地惑」也。対治此惑、必資明解。惑既有三、解亦如之。此解能安前理、謂之為忍。初忍最劣、明少昧多、故奪其「見」名以「依」忍為稱。「種依」忍者、憑師決定、未能自了之名。中忍轉勝、心調順理故以「順」為名。順者、捨師從理之稱也。上忍最深、心与理冥故、仍以前境為名。無生者、前境空寂之稱也。

(羽二七一・一〇)

大意を示せば、行者の惑にはおおよそ三つがある。最重は見諦惑であり、惡業を引き起こし三途の生を受ける。次重は思惟惑であり、善業を引き起こし人天の生を受ける。最輕は無明住地惑であり、變易の生を引き起こす。この三惑を対治するため、三つの「解」いわゆる三忍があると説かれている。

以上は法安の見解であり、ここでは惑の種類、業、転生の場所、そして三忍を説明している。前掲の傍線部には「勝鬘經の所謂無明住地惑なり」とあることから、第三の最輕「無明住地惑」と『勝鬘經』が結び付けられていることが確認できる。注意すべきは、見諦惑・思惟惑・無明住地惑という三つが『勝鬘經』には説かれていないということである。²³すでに明らかな

ように、見諦惑と思惟惑は『成実論』、無明住地惑は『勝鬘經』に基づくものであるから、法安はいわゆる四住地惑の見一処住地が見諦惑（見道）に相当し、欲愛住地・色愛住地・有愛住地という三つが思惟惑（修道）に相当すると考えていたことが知られる。²⁵

次に問題となるのは初忍の名称である。前掲の波線部には「初忍は最も劣れる段階であり、迷いが多くて悟りが少ない、その見諦惑の名を止めて、依忍と称する」とあった。ところが、現存している大藏經データベースや中華大藏經データベースを検索しても、三忍の一つに「依忍」が見られないのである。これは恐らく「依忍」ではなく、「信忍」の誤写と考えて差し支えないと思われる。というのも、法安と近い時代の成立した『仁王般若波羅蜜經』（大正八所収、以下『仁王經』²⁶）には、次のような五忍が説かれているからである。

五忍是菩薩法。伏忍上中下。信忍上中下。順忍上中下。無生忍上中下。寂滅忍上下。

（大正八・八二六中）

これを見ると、最初の伏忍と最後の寂滅忍を除けば、信忍・順忍・無生忍という用語が確認できる。そのほか、五四五年（大統十一年）に抄写された『法華經文外義』「十地者」には以下のような三忍が説かれている。²⁷

三忍者、信忍、順忍、無生法忍。

信忍者、有其二義。一者聞信、二者証信。聞信者、淺行之徒未能自悟、必須憑師藉教、

然後得解。

（『藏外仏教文獻』二・三四九）

文字囲いに示されるように、三忍とは、信忍・順忍・無生法忍である。それに、傍線部の聞信とは、修行の浅い弟子は未だ自ら悟ることができず、必ず師の教えによって理解するとされている。前掲の二重線で法安が説いた「憑師決定、未能自了之名」という初忍の説明は、「師の教えによって決定することはできるが、まだ自らの能力だけで悟ることはできない状態を表す名称」ということである。これと『法華經文外義』の記述を比較すれば、おおむね同じ意味の内容であることが明らかである。ゆえに『義記』に記される「依忍」は「信忍」の誤りであることがわかる。要するに、法安が説いた三忍とは、初忍＝

信忍、中忍＝順忍、上忍＝無生忍ということである。

以上、法安が説く三惑と三忍との内容を確認した。ここで注意したいのは、見諦惑・思惟惑・無明住地惑という三惑論が、当時においても一般的な見解であったと推測される点である。それは『大般涅槃經集解』に記録された僧宗、宝亮の注釈からも確認することが出来る。

僧宗は『大般涅槃經』の「善男子仏性者所謂十力(至)一切衆生悉有仏性」²⁸を注釈するに当たって三惑に触れている。

僧宗曰、第四上雖明当有、未知何為体。今顯出其体、乃是生死之外也。理既深遠。若欲見、自非破三重惑障、則無由觀見也。三惑者、謂見諦・思惟・無明住地也。
(大正三七・五五一上)

傍線部を見れば明らかのように、法安と同時代の僧宗もまた、見諦・思惟・無明住地という三惑を語っている。重要なのは、僧宗が取り挙げる『涅槃經』の注釈範囲である。『涅槃經』には「一切衆生に悉く三種の煩惱を破ること有るが故に、然るに後に「仏性を」見ることを得」とあるから、僧宗はこの「三種の煩惱」を三惑と見なしていたのであろう。要するに、僧宗は法安と同じ三惑を使用しながらも、三惑を破すれば仏性を見ると考えていたことが知られる。三惑は南北朝時代において最も重要な仏性論とも密接に結びついているのである。

南齊(四七九～五〇二)から梁(五〇二～五五七)にかけて活躍した宝亮は、法安の「十地義」における質問者(法安の講義後に行われる問答)であるため、当然彼も前述の三惑を使用する。『大般涅槃經集解』には以下のようにある。

宝亮曰。前略：今從譬如色法下。²⁹第一段仏性雖有、但衆生為煩惱障、故不得見。若能破三種惑、見諦・思惟・無明住地、煩惱都尽、則見仏性也。
(大正三七・五五一上)

宝亮もまた、法安・僧宗と同様、見諦・思惟・無明住地という三惑を論じている。加えて、宝亮は「煩惱(三惑)都て尽きれば、則ち仏性を見るなり」と述べており、三惑と仏性を深く結び付ける思考法は前の僧宗と軌を一にする。

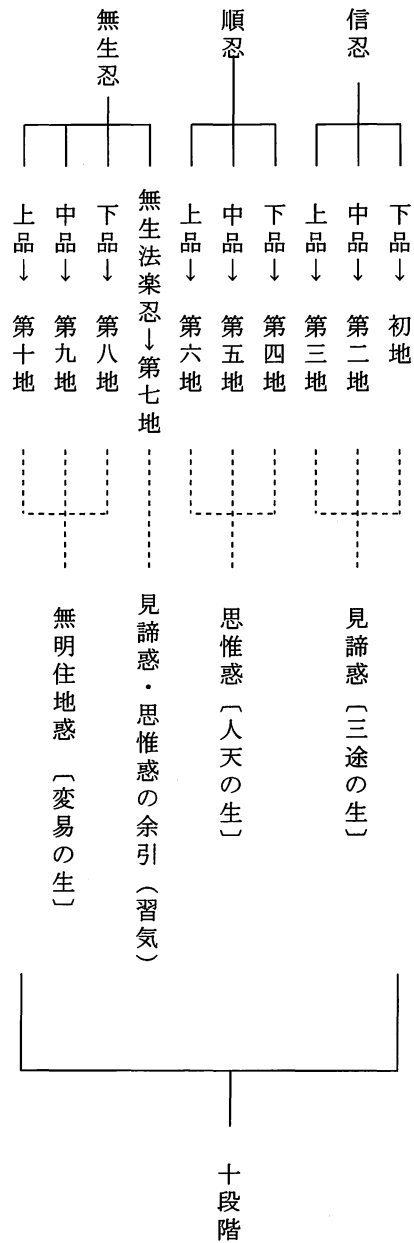
前述したように、僧宗・法安・宝亮は涅槃師である。ただし、『高僧伝』には、「釈法安：中略：講『涅槃』『維摩』『十地』『成実論』（大正五〇・三八〇上）、「釈宝亮：中略：講『大涅槃』凡八十四遍、『成実論』十四遍、『勝鬘』四十二遍」（大正五〇・三八一下）と記されている。法安、宝亮は涅槃師でありながら、成実師（また成実論師）でもあったことが知られよう。成実師にせよ、涅槃師にせよ、彼らが見諦惑・思惟惑・無明住地惑という三惑論を語っていたことは、当時の南朝仏教者の共通性という点からも極めて重要であるように思う。

（二）、法安の十地義

上記の通り、「中寺法安解十地義」の冒頭には、三惑（見諦惑・思惟惑・無明住地惑）と三忍を講説するにあたつて、十地についての言及がなされていた。法安はこれ以後、三忍と修行階位（十地）との関係などについて詳細に論じていく。

一一忍中各為三地。依忍下品為初地、中品為二地、上品為三地。順忍下品為四地、中品為五地、上品為六地。無生忍下品為八地、中品為九地、上品為十地。其第七一地對治二因中間之惑。二因中間之惑、即愛樂果地、功德之情也。治此惑地之解、謂之無生法樂忍。謂之法樂者、從所治受名也。体深於順忍、有同於無生、故復以無生言之。此忍所以不開為三、但為一地者、以愛法之心、本非正結。猶是前惑余引、不劣多行、所以不足為三。但為一地、並前為十地也。（羽二七一・一一）

ここでは、信忍の下品が初地、中品が第二地、上品が第三地に相当し、順忍の下品が第四地、中品が第五地、上品が第六地に相当し、無生忍の下品が第八地、中品が第九地、上品が第十地に相当することが説かれている。注意すべきは傍線部の第七地の位置付けである。第七地は無生法樂忍とも呼ばれ、第六地から第八地の架け橋のような一地を意味する。しかも第七地の惑は見諦惑・思惟惑の余引（習氣）であり、この余引は煩悩の本体ではなく、仏法を愛着する心とされる。以上を図示すれば次の（図一）ようになる。



(図 1)

それでは法安の説いた十地は具体的にどのようなものであったのか。以下にこの問題に検討を移してみよう(改行を加えて本文を示す)。

- 第一曰歡喜。以初登聖境、始出凡界、特欣所遇、故以為名。
- 第二曰離垢。十惡垢也。大判三品。初地除上、二地除中、所去已多、故受「離」名。
- 第三曰明。得十二門禪故、心解慮靜。心解慮靜故、初忍滿足。心靜解足故、以「明」為名也。
- 第四曰炎。因前為名也。如灯燭外明、不及內炎明。四地之明有感於前、故以「炎」為名也。
- 第五曰難勝。此地多通世事、医方工巧等。此等是世人所知而不及菩薩。唯六住以上、乃能勝之故、以「難勝」為名也。
- 第六曰現前。此地洞解因緣之空、如在目前故、以為名也。
- 第七曰遠行。六地終心始出三界、未足称「遠」。七地之行、乃合斯称故、以為名也。

第八日不動。入大寂滅、通達色難、過心意之境、絶動求之念、故以為名。

第九日善慧。通達心難、成就四弁、又無生之慧、有善於前故、以為名也。

第十日法雲。慧解深明達色心集起、前第九日地、謂之善慧從內解受稱。今此法雲、以外益為名。外益弘曠、若雲雨之無辺、故以「法雲」為稱也。

（羽二七一・一一）

これらの概要を纏めると以下のようになる。

第一地（歓喜地）――初めて聖者の境地に至り、凡夫界から出る。

第二地（離垢地）――十惡垢を除去する。

第三地（明地）――十二門禪を得たため、心のはたらきが静まり「智慧が照らし」初忍を完成する。

第四地（炎地）――四地の明は前（第三）地の明より感じる。例えば、ともしびの外炎の明さが内炎に及ばない様である。

第五地（難勝地）――世間の事、医方明・工巧明など「の五明」に通達する。

第六地（現前地）――「十二」因縁の空を悟り、それが目の前にあるようである。

第七地（遠行地）――六地の終心において「欲界・色界・無色界の」三界から出るも、七地ではより高い境地に至る。

第八地（不動地）――大寂滅に入り、色境の難に通達し、心意の境地を過ぎ、心の「動・求」はたらきを絶つ。

第九地（善慧地）――四弁を成就して、無生の智慧を得る。

第十地（法雲地）――前の第九地は内解（自らさとらせる）より称を受けるが、今の法雲地は外益（衆生をさとらせるため）によって名づけられるものである。雨を降らすように衆生に利益を与える。

以上が法安の述べるところの十地である。十地の名称は歓喜地、離垢地、明地、炎地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地である。これは六〇巻『華嚴經』「十地品」における十地の名称と一致する³¹。法安によれば、第一地は歓喜地であり、初めて聖境に登り、凡界から出ると述べられる。つまり、初地は聖者の位を意味しているのであろう。これを踏まえると、法安は、外凡夫↓内凡夫（種性地から解行地）↓十地（歓喜地から法雲地まで）↓仏果という修行階位を想定していたと思われる。

また僧宗と宝亮は、『大般涅槃經』「四依品」に対する注釈において行位に言及している。僧宗の行位説は宝亮説と基本的に同様であると指摘され、これに関しては、船山徹氏の「南朝仏教と地論宗」で詳述されるため、ここでは本論に関わる要点のみを挙げるにとどめる。

ア、宝亮は、三十心は十住（初の十心）・十行（第二の十心）・十廻向（第三の十心）であると指摘している。³² 宝亮が法安の「十地義」講義現場に質問者として登場したことから考えても、宝亮が説いた三十心は法安の三十心と共有されていた可能性が極めて高い。

イ、菩薩初地に登って聖人となるという点については、法安、僧宗、宝亮三師全てが同様な見解を示している。³⁴

ウ、法安は「六地では三界惑を断じる」、「第七地では前惑（見・思）余引を断じる」と説いている。僧宗は「今、六地の終心、三界惑を断じ：中略：第七地では習気を断じ始める」と説いている。³⁵ 要するに、両者とも第六地で三界煩惱を滅尽し、第七地で習気を断じ始めるという理解が一致している。

エ、僧宗は菩薩位（涅槃解釈）と声聞位（『大智度論』の共地解釈）との対応関係を説いており、しかもそれは『華嚴經』系統の歡喜地にはじまる十地を前提とすることが指摘されている。³⁶

以上、法安の十地解釈を考察した。法安の「十地義」をきっかけとして、三惑（また四惑）を対治すること、三忍（また四忍）と華嚴十地（修行の十段階）と密接に関連することを明らかにした。

四、地論文献に見られる「十地義」

南朝教学と地論教学のかかわりについては、青木隆氏や船山徹氏などによって優れた論考が提出されている。³⁷ 船山徹氏は、南地の成実涅槃學が北地の地論南道派に何らかの影響を与えていることを、地論文献S六一三Vなどの教判及び『法界図』と『法鏡論』の行位解釈に見られるとしている。本章では「十地断伏義」について検討を加え、成実涅槃學派と地論學派における十地解釈の共通的な見解について補足する。

前項において、法安の十地解釈を紹介したが、法安がどの經典に依拠して、十地解釈を行ったのかについては確定することが難しい。管見の限り、鳩摩羅什訳『十住毘婆沙論』³⁹（大正二六所収）、求那跋陀羅訳『相續解脫地波羅蜜了義經』⁴⁰（大正一六所収）、堅意菩薩造道泰訳『入大乘論』⁴¹（大正三二所収）などに十地説が見られるが、いずれの十地説を確認しても、法安の十地解釈と完全に一致することがなく、部分的な共通しか見られない。この問題に関しては今後の研究課題としたい。ただし、法安の講義と地論文獻における十地解釈について、共通点が見られることは指摘できるだろう。

地論文獻と考えられるP二九〇八⁴²には三忍と十地に関する記述が確認される。長文であるため、各忍ごとに示してみよう。

四依義。依『瓔珞經』解有五忍。住前有伏忍有三品。下品習種性。何故名習、始從發心住、終至灌頂住：中略：初住至三住名信忍、亦有三品。下品名歡喜地。何故名歡喜。離五怖畏、慶有所除、慶有所得、故生歡喜。信忍中品名離垢地。何故名離垢。能離十惡垢、故名離垢。信忍上品名明地。得十二門禪觀、智慧明照、故名明地。

（『藏外地論宗文獻集成』・一二八—一二九頁）

南本『大般涅槃經』卷第六「四依品」の冒頭には四種の人（凡夫、須陀洹・斯陀含、阿那含、阿羅漢）が挙げられている。⁴³「四依義」はこの四種の人についての經文に対する注釈である。言うまでもなく、P二九〇八の「四依義」は、南本『涅槃經』「四依品」に関する議論である。

さて、P二九〇八の「五忍」に戻ると、地前には伏忍が加えられていることがわかる。信忍は初地から三地までの対応を示唆しており、すなわち初地Ⅱ歡喜地、二地Ⅱ離垢地、三地Ⅱ明地ということである。ここにおける初地が『十地經論』に基づいていることは以下の内容から窺い知ることが出来る。

經曰。所以者何。是菩薩摩訶薩得歡喜地已。所有諸怖畏即皆遠離。所謂不活畏、惡名畏、死畏、隨惡道畏、大衆威德畏。……中略……論曰。此五怖畏是初地障。

（大正二六・一三六下—一三七上）

『十地經論』には「歡喜地を得た菩薩は、不活畏・惡名畏・死畏・墮惡道畏・大衆威德畏の諸怖畏を離れる」と説かれている。⁴⁴更に『十地經論』では「初証聖處、多生歡喜故、名歡喜地」（大正二六・一二七上）ともある。つまり、P二九〇八に「初証聖處、多生歡喜故、名歡喜地」という『十地經論』の本文が明記されていないにもかかわらず、初地に至ると聖者となるという点については、法安の初地解釈（初登聖境）⁴⁵も地論教学も同様な見解を有していたことが想定される。

P二九〇八の歡喜地に「初登聖境」のような説明が見られないが、それに対して、離垢地と明地については、法安の離垢地（十惡垢を除去する）と明地（十二門禪、智慧に照らす）の解説とP二九〇八の解釈とが完全に一致していることは明らかである。加えて、P二九〇八に使う「十惡垢」「十二門禪」という用語は現行『十地經論』に見い出せないため、P二九〇八における離垢地と明地の解釈は法安の見解を取り入れた可能性が高いのではないかと考えられる。次いで、P二九〇八では順忍の三品を説明する。

四地至六地名順忍。下品名炎地。広修三十七品、智慧炎熾、余朗前明、故名炎地。順忍中品名難勝地。何故名難勝地。依『瓔珞經』解、作十六諦觀、依『地經』作十四諦觀。善達世間医方針灸、刺繡輔方、彫文刻鏤、無事不達、世無与等、故名難勝地。順忍上品名現在地、作十種逆順、觀十二因緣、波若現在、故名現在地。

（『藏外地論宗文献集成』・一二九—一三〇頁）

地論教学でも順忍は四地から六地までの修行段階と対応することが知られる。炎地については、三十七品を修することを除けば、智慧の炎が前地より明るいという説明が法安の炎地（四地の明は第三地より感じることに類似していることが窺える。難勝地については、世間の医方・刺繡や彫刻のような工巧明など（の五明）を通過する記述が法安の明地（世間の事、医方明・工巧明など（の五明）に通過すること）と同様である。現在地については、逆順十種の十二因緣觀をなして、般若が現われるという解釈が法安の現前地（十二因緣の空が目の前に現れること）と類似している。ただし、P二九〇八における第六地の名称は現在地であるが、現行の『十地經論』では第六地の菩薩を「十種逆順觀因緣集法」と説いており、第六地の名称を現前地としている。⁴⁷おそらく、意味的に考えると、現在地にせよ、現前地にせよ、二つの名称にそれほど大差はなからう。⁴⁸

以上、十地における初地から六地までの解釈を見てきたが、地論教学と法安の見解とには共通性が看取される。ただし、この後の第七地より第十地までの解釈は、地論教学と法安の解説とではあまり関連性がない。次にP二九〇八における無生忍の解釈を見てみよう。

七地至九地名無生忍、亦有三品。下品名遠行地。何故名遠行地。越過凡聖之近、故名遠行地、亦可遠取⁴⁹仏果。無生中品名不動地。觀空緣有、初無第⁵⁰觀、不為有無第⁵¹觀所動、故名不動。無生上品名善慧地。天下難知莫過於心、而能深知、故名善慧地。

〔『藏外地論宗文獻集成』・一三〇頁〕

傍線部を見ると、無生忍は七地、八地、九地に対応するようである。法安の無生忍は八地、九地、十地に対応していた。この点、法安は順忍（上品、第六地）と無生忍（下品、第八地）との間に無生法樂忍（第七地）を設けるため、地論文獻P二九〇八における無生忍と三地との対応には相違が見られることになる。

最後にP二九〇八における寂滅忍の三地に関する説明を確認してみたい。

滅忍亦有三品。下品名法雲地。第十地菩薩、能一念心中能含納十方諸仏說法雲雨。復能說法備物、其猶雲雨、故名法雲。寂滅忍中品名無垢地。無明煩惱能垢淨心、金剛心菩薩隣仏之解、能斷奄理無知尽、故名無垢。仏寂滅忍上品名妙覺地。此通名解義、仏亦名忍。

〔『藏外地論宗文獻集成』・一三〇頁〕

「中寺法安法師解十地義」の講義記録からみると、法安は寂滅忍を説いていない。そもそも無垢地と妙覺地とを説く經典は『菩薩瓔珞本業經』である。『菩薩瓔珞本業經』は、十住・十行・十廻向・十地の四十位と無垢地・妙覺地の二位とを合わせて四十二位という修行段階を提示すると考えられている。⁵²そこで前掲の資料を見ると、地論教学では菩薩十地の後に金剛心菩薩の無垢地と仏の妙覺地を加えていることが明瞭である。これは成実涅槃師である法安の見解がより進展したかたちでの教学と考えることが出来る。

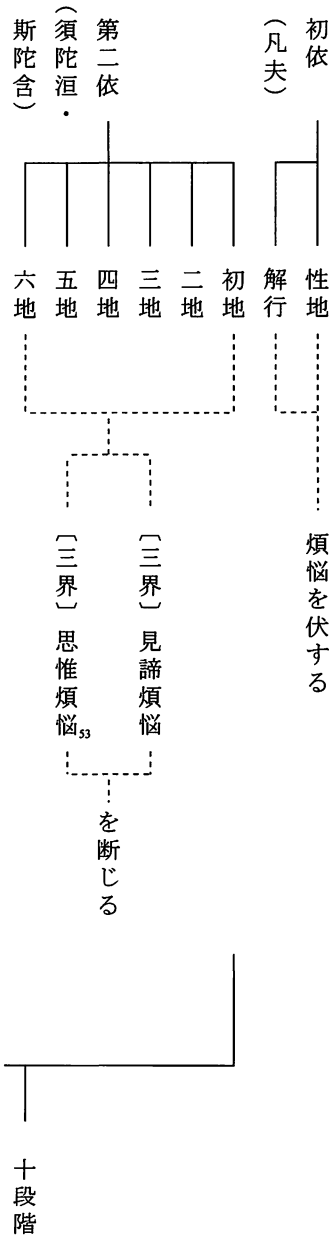
法安は三惑（或いは四惑）と三忍（或いは四忍）と十地を対応させる見解を取り、地論文献 P 二九〇八では五忍と十二地（十地＋無垢地・妙覺地）を対応させる見解を取る。ところが、信忍の三地（初地から三地）と順忍三地（四地から六地）の対応関係と、離垢地・明地・炎地の解説及び用語の一致が窺えることは前述の通りである。要するに、『十地經論』を参照しなかった法安の十地解釈と、『十地經論』を参照した地論の十地解釈が部分的に一致しているのである。

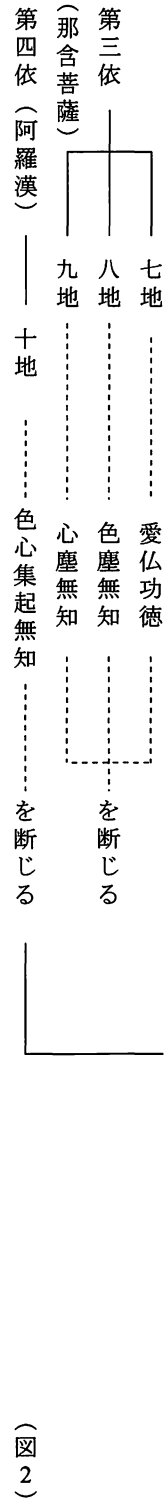
そればかりか、以上の議論は「四依義」における五忍を説明する箇所である。北本『涅槃經』（四〇巻）には「四依品」がないため、「四依義」は南本『涅槃經』（三六巻）に基づいて展開される理論である。これは南地の涅槃教學が北地の地論教學に流入したことを示すのではないか。「四依義」の後、P 二九〇八では「就断惑以制四依」を記述する。

性地、解行二十心、現得生法二空、能深伏煩惱、制為初依。從初地至六地、得真空無漏、能永断三界見諦修道二輪煩惱、制為第二依。七地断愛仏功德、八断色塵無知、九地断心塵無知、名那含菩薩、制為第三依。十地断色心集起無知、名阿羅漢菩薩、制為第四依。

（『藏外地論宗文献集成』・一三一頁）

以上、ここでは具体的な地の名称を表記してはいないが、断惑と十地と四依との対応関係が次（図 2）のように纏められる。





第六地において三界の見諦惑・思惟惑を断じ、七地において仏法を愛着する功德を断じるという内容は、法安が説いた初地から七地までの断惑論（前掲した図1）と一致していることがわかる。加えて、地前において種性地と解行地を用いることもまた法安と同様の見解である。⁵⁴

さらにP二九〇八では直接に南方諸師の見解を引用している。

若依南方諸師解、習種性伏欲界見諦。性地伏色界見諦。解行地伏無色見諦。初地断欲界見諦、伏欲界修道。二地断色界見諦、伏色界修道。三地断無色界見諦、伏無色修道。四地断欲界修道、伏七地愛仏功德惑。五地断色界修道、伏八地色塵無知。六地断無色界修道、伏九地心塵無知。七地断愛仏功德、伏十地色心集起無知習。八地断色塵無知。九地断心塵無知。十地断色心集起無知。住前三十心菩薩、唯伏不断、従初地至七地、亦断亦伏。八地以上唯断不伏。

（『藏外地論宗文献集成』・一三一頁）

ここでの「南方諸師」の説はおそらく『大般涅槃經集解』に見られる南朝教理学における断惑説を踏まえていると考えられる。⁵⁵ 後述するように、南方諸師は煩惱を伏する十地と、煩惱を断じる十地という二種を説いており、これと法安の見諦惑・思惟惑・無明住地惑の対治のあり方とを比較すれば、ここでの南方諸師の見解は法安の見解をより詳細に分類したものであることがわかる。すなわち、対治は「伏する」「断じる」の二種に分けられるものの、法安の「十地義」と「南方諸師」の見解において、以下のことを共通している。

ア、地前の三十心を用いる。そして初地に至るまでを性地と解行地の二つとする。

イ、第六地において、三界における見・思の二惑を断じる。

ウ、第七地において、仏果に愛着する惑（見・思の余引）を断じる。

なお、その他の地論文獻、例えばP二一八三Vの背面に「解断伏義」があり、信忍三地、順忍三地と三途（地獄・餓鬼・畜生）の惑・人天の惑とそれぞれに対応する解釈が明記されているが、地論文獻における断惑論と十地に関する詳細な考察は別の論に譲りたい。あくまでも本章は、法安と地論文獻における十地解釈の共通点を指摘するにとどめる。

五、三論文獻に見られる「十地断伏義」

既に紹介した通り、『大乘四論玄義記』は三論学派の文獻であると考えられる。崔鉉植氏によると、『大乘四論玄義記』には「十地義」（卷五欠）・「二諦義」（卷三）・「仏性義」（卷六）・「三乘義」（卷十二）などの議論が含まれており、当時の三論教学が『十地経論』や如来藏系経論などの漢訳文獻に基づいて教理を整備していったと考えられている。本章は、三論学派の慧均が記録した成実師の「十地断伏義」を考察する。

まず、慧均は以下のように評価している。

第一明断伏義。略如「夢覚義」中釈也、今約地明之、十地義、成実論師推与莊嚴家也。周斉二国、盛明十地義。此義従来雖盛明之、復後時菩提勒那兩三蔵来、翻『十地論』、功用由帰兩師也。（『大乘四論玄義記』・二六九頁）

これを解釈すれば、「〔煩惱の〕断と〔煩惱の〕伏を解釈すると、要点は「夢覚義」（『大乘四論玄義記』卷四、散逸）に解説した通りである。今、地を主題としてこれを説明すると、十地義に関して成実論師は代表として莊嚴家を挙げる。十地義は北周（五五六～五八一）と北斉（五五〇～五五七）の二国では盛んに説明されていたが、後に菩提流支（？―五〇八～五三五―？）と勒那摩提（？―五〇八―？）が北魏（三八六～五三四）に到来して『十地経論』を翻訳した（ので、以前よりも更に

十地義の解明が進んだ」、その功績は菩提流支と勒那摩提の二人の師に帰せられる」となるう。

慧均によれば十地断伏義は二つの特徴に分けられている。それは『成実論』に基づく解釈と『十地経論』に基づく解釈である。ここに成実論師の代表としての莊嚴寺僧旻が挙げられているが、すでに述べたように法安は僧旻より前世代の成実論師であると見なされている。

ここで『大乘四論玄義記』における四惑論を見てみよう。

今『成実論』、釈十地断伏義不同。一莊嚴家云。所伏之惑、略有四種。一者見諦惑、二者思惟、三者習氣、四者無知也。於此四惑、分為十品。見諦或為三、謂上中下品、從多為言。以上品生地獄、中品招畜生、下品墮鬼神、如『論』說也。以思惟為三品、即繫三界。欲愛住地以為上品、色愛住地以為中品、有愛住地以為下品也。此三界思惟繫地。必異不同也。見諦配於三塗。是從多說之也。習氣是見思之余殘、故不須分別、合為一分也。無明住地其力最強、能障深行、断之最久。且約事相、分為三別。謂色塵無知以為上品。心難無知以為中品。集起無知以為下品。『誠論』三無知、互有龜細。今以從多遂事故、如向說也。於四分中、開為十品、亦十階伏之。

（『大乘四論玄義記』・二六九—二七〇頁）

要点をまとめれば以下のようになる。莊嚴家は見諦惑・思惟惑・習氣・無明住地惑という四惑を説いている。習氣は見諦惑・思惟惑の余殘である。この四惑が十品に区別されている。このように見れば、莊嚴家の四惑論は実に法安の三惑論（見諦惑・思惟惑・「見思の余引」・無明住地惑、前述図1）と一致しているといつてよい。そして、法安と同様に、莊嚴家も四惑と三途・三界を共通に論じている。見諦惑の上・中・下三品は地獄・畜生・鬼神に対応する。これは『成実論』に説かれるようである。思惟惑の三品は欲愛・色愛・有愛の三界住地に縛属する。無明住地惑はその力が最強であり、よく深い修行を障り、これを断じることが最も時間がかかる。無明住地惑は『勝鬘經』による解釈であり、これも法安の「即『勝鬘經』謂う所の「無明住地惑」也」と一致する。

以上を踏まえて、より明確になることは、無明住地が事相の立場によって、色塵無知・心難無知・集起無知という三つに分けられていることである。注意すべきは、このような分け方は『勝鬘經』に説かれるのではないということである。大正新脩

大藏經や中華大藏經などのデータベースを検索してみると、色塵無知・心難無知・集起無知という三つの用語がセットとして見られるのは『大乘四論玄義記』のみである。また、『大般涅槃經集解』における宝亮は「以類十地菩薩、断色心龜障乃尽、而色心集起之源未断」（大正三七・四三六下）と述べている。宝亮もすでに「色・心集起」という表現を使用しているのである。これについては資料が残っていないため、無明住地惑に対する三つの分類に関して、はっきりとしたことは分からない。しかし、成実涅槃師である宝亮の時代には既に知られていたことは確実である。

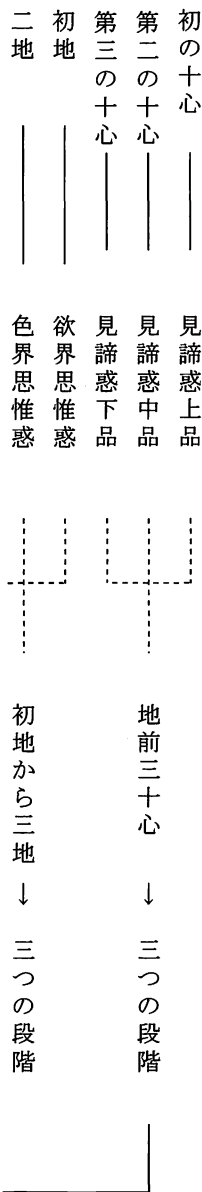
さらに地論文獻 P 二九〇八には、「色塵無知・心塵無知・色心集起」が用いられている。P 二一八三にも「色塵無知・心塵無知・色心集起無知」（『藏外地論宗文獻集成』・一〇〇頁）という記述がある。要するに、成実涅槃學派にせよ、地論學派にせよ、無明住地惑に対する分析は一致しているのである。

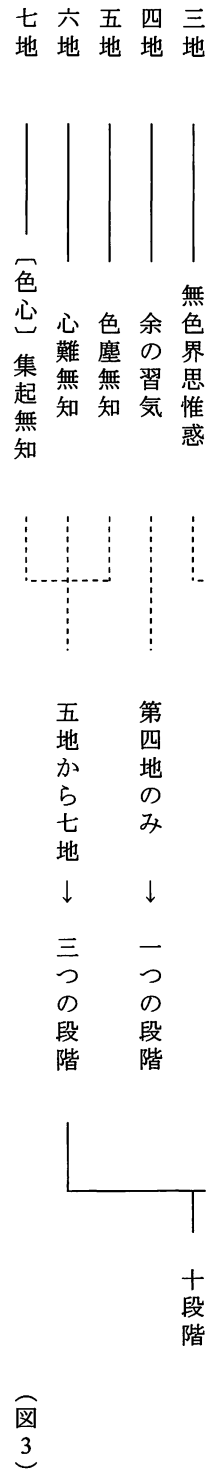
次に『大乘四論玄義記』における四惑の十品と修行段階などの記述を確認したい。

第一、地前。前十心、伏見諦上品。第二、中十心、伏見諦中品。第三、後十心、伏見諦下品。第四、初地、伏欲界思惟。第五、二地、伏色界思惟。第六、三地、伏無色界思惟。第七、四地、能伏余習氣。第八、五地、伏色塵無知。第九、六地、伏心難無知。第十、七地、伏集起無知也。所以必論於地前伏見諦惑尽者、從凡成聖、此事良難、見諦違聖道。若伏此惑已、方可入聖位。如其未遑、不容得道也。

（『大乘四論玄義記』・二七〇頁）

これに基づいて十の修行段階と惑を伏すとの対応を図示（図 3）してみよう。



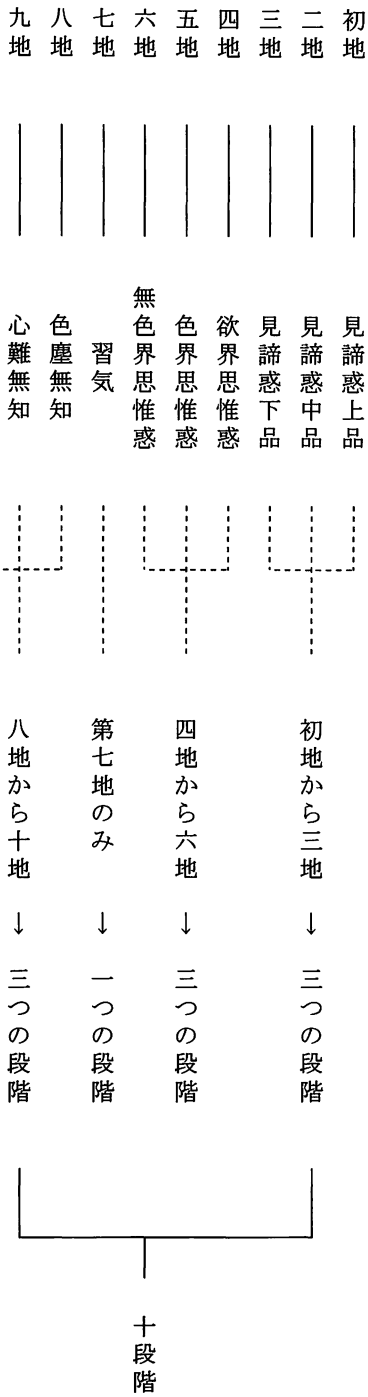


さらに、莊嚴家の解釈は四惑を十段階で伏することにとどまらず、道を断ずる十段階によっても示される。

断道亦十階。初地断見諦上品。二地断見諦中品。三地断見諦下品。四地断欲界思惟。五地断色界思惟。六地断无色界思惟。七地断習氣。八地断色塵無知。九地断心難無知。十地断集起無知。

(『大乘四論玄義記』・二七〇頁)

この十地の断煩惱を图示(図4)すると以下ようになる。



以上は、慧均が記述した十段階によつて煩惱を伏する十地と煩惱を断じる十地という二種の見解である。これはP二九〇八に記録された南方諸師の見解と類似している。

また慧均は涅槃師の僧亮や開善寺智藏の見解をも引用している。

引大亮師釈「生生」中云、三住見諦尽、四住欲界思惟尽也。開善等云、六地之末必与羅漢齊功、故無色結尽、如『瓔珞經』意也。又即知五地色界思惟尽也。
(『大乘四論玄義記』、二七〇頁)

大亮は僧亮(『高僧伝』釈道亮)のことであるが、『大般涅槃經集解』巻四六には以下のような見解が述べられている。

僧亮曰。三住見諦結尽、四住欲界思惟結尽、於欲界生。雖生不生、以生自在故也。

(大正三七・五一八中)

傍線部を見れば明らかなように、『大乘四論玄義記』における「大亮師釈」は『大般涅槃經集解』の僧亮の見解と全く同じである。開善は開善寺智藏のことである。重要なのは智藏は法安の講義現場での質問者として、法安が講義した「十地義」の内容を知っていたということである。以上を踏まえると、僧亮と智藏によれば、三地で見諦惑を滅尽すること、四地で欲界思惟惑を滅尽すること、六地で無色界の煩惱を滅尽すること、これらの内容が述べられている。

さらに『大乘四論玄義記』では智藏の見解を補足するため以下のような内容を提示する。

二少(小)莊嚴龍光伝開善義。或云三地断見惑尽、或云初地断見惑尽、而多用初地尽。故開善門徒報恩等、依『瓔珞經』云、初地菩薩断見諦惑。故『十地論』亦云、初地見諦惑尽也、二地菩薩断人中煩惱、三地菩薩断天上煩惱、四地菩薩断三禅已下煩惱、五地菩薩断三空已下煩惱、六地菩薩断非相想非非想煩惱。故五住惑中後四住地惑、亦蘊在其中、是旧意。彼

云四住惑と見思惑、無別異体、大小両乗名為異耳。

（『大乘四論玄義記』・二七一頁）

これを解釈すれば、「小莊嚴法師と龍光寺法師は開善寺智蔵の、「三地で見諦惑を断じ尽くす」ということもあり、「初地で見諦惑を断じ尽くす」ということもあるが、多くの場合は初地で「見諦惑を断じ」尽くすという説を採用する、という教義を伝える。したがって智蔵の門人である報恩寺法師など「も同様に」『菩薩瓔珞本業經』に依拠して、「初地の菩薩が見諦惑を断じ尽くす」といつている。それに「『菩薩瓔珞本業經』だけでなく」『十地論』（『十住論』か）でも「初地で見諦惑を断じ尽くす」という。⁶¹『菩薩瓔珞本業經』によれば、「一地の菩薩は人中の煩惱を断じ、三地の菩薩は天上の煩惱を断じ、四地の菩薩は三禅以下の煩惱を断じ、五地の菩薩は三空以下の煩惱を断じ、六地の菩薩は非想非非想処の煩惱を断じるといふ。⁶²したがって、五住惑（無明住地惑・四住地惑）の後の四住地惑（見一切住処・欲界住地・色界住地・無色界住地）も、六地に至る菩薩の断じる煩惱に含まれている。これは旧師の見解である。旧師のいう四住地惑と見諦惑・思惟惑とは別々のものではなく、異なる体があるものでもない、大乘と小乗の「煩惱の」名称が異なるのみである。」となろう。

慧均63は小莊嚴寺法師と龍光寺法師64の伝えた開善寺智蔵の見解を指摘する。智蔵の見解は、見諦惑を滅尽するのは初地か或いは三地かという二説がある。初地において見諦惑を滅尽することはよく採用される。さらに、六地の菩薩まで断滅する煩惱は四住地惑であり、別名として見諦惑・思惟惑であると指摘されている。これは法安の第六地において思惟惑を対治する見解（前掲した図一）に類似していることがわかる。

以上、『大乘四論玄義記』に記録される「断伏羲」を見てきたが、無論、『大乘四論玄義記』には多種多様な「断伏羲」が説かれている。けれども、上掲した成実論師たる莊嚴寺僧旻の見解は貴重である。僧旻の「十地断伏羲」に先行する法安の「十地義」を踏まえると、以下のようなことが明らかになるからである。

ア、法安も僧旻も三惑（また四惑）と三忍（また四忍）と十地との対応関係を説いている。

イ、第六地において、見諦惑と思惟惑を断じると説くことは、法安、僧旻、智蔵三師に共通する。

ウ、僧旻も初地の前に三十心を用いるが、この初地は初地から七地まで煩惱を伏することを論じる行位である。したがって、初地に至るまで見諦惑を伏することとなる。

エ、法安における十地解釈、『菩薩瓔珞本業經』の成立、『十地經論』の訳出、これらによって僧旻や智藏の十地解釈は煩惱を伏する十地と煩惱を断じる十地の二種解釈まで発展していった。

なお、『大乘四論玄義記』における「断伏羲」は『十地經』、『十住經』、『菩薩持地經』、『瓔珞經』、『仁王經』⁶⁵、『華嚴經』などの諸經を引用しながら、より複雑な議論が展開されている。本研究は成実涅槃繫師に着目したものであるため、『大乘四論玄義記』に対する詳細な検討は別稿に譲りたい。

六、むすび

以上、法安の十地義、及び法安の十地義に関連する地論文献、三論文献に記述された十地〔断伏羲〕義などを考察してきた。その検討結果をまとめると次のようになる。

(一) 法安が説いた三惑（見諦惑・思惟惑・無明住地惑、また四惑）は、僧宗・宝亮も用いていた。そのため、三惑という枠組みが南朝仏教において共通の煩惱論となっていたと考えられる。

(二) 法安によって、三惑を対治することと修行階位が結び付けられて、三忍（また四忍）と十地との対応関係が言及された。現存する羽二七一『義記』の記録からみると、成実涅槃繫師である法安は、種性地・解行地・十地（華嚴十地の名称）の行位解釈を説いている。

(四) 法安が講説した三惑を対治することと、十地との対応は、地論文献と三論文献において、二種の十地解釈に発展していく。つまり煩惱の対治は煩惱を伏することと煩惱を断じることとの二種に分けられる。また、法安と同じように種性地・解行地・十地の行位が説かれるが、三忍と十地との対応関係については共通点と相違点がある。

(五) 法安より後輩の莊嚴寺僧旻・開善寺智藏は、三惑（また四惑）と煩惱の伏・断の二種の十地を説いている。断・伏の二説を発展したことに共に、見諦惑を断滅するのは初地かまた三地かという二説も形成した。けれども、修行の第六段階（第六地）において、見諦惑・思惟惑を断滅することについては、法安（前掲した図1）も、僧宗も、僧旻（前掲した図3、図4）

も智蔵も同様な見解を示している。

要するに、地論文献や三論文献でよく議論される「断伏羲」は、その先行教学として南朝仏教の成実涅槃学派に遡ることが可能である。このように、成実涅槃学派、地論学派、三論学派のそれぞれの十地解釈に共通点があるということは、成実涅槃学派から地論学派や三論学派に影響を与えた後と考えてよいのではないか。「断伏羲」は、撰論学派や天台学派など、その他の学派でも語られる重要なテーマとなること、また唐に至って日本と中国との仏教交流においても未解決の議題として取り扱われている。たとえば、『天台宗未決』⁶（最澄問・道邃答、『卍新纂続蔵経』五六所収）には次のようにある。

今疑此断伏羲掘何経論。『華嚴』『瓔珞』『仁王』『新金光明』『勝天王』『大品』『涅槃』等経、『十地』『撰大乘』『地持』『十住』『婆沙』『大智』等論、如是経論、雖明地位、而未有此傍正、伏断請示誠文。（『卍新纂続蔵経』五六・六八四下）

ここでは諸経論に散在する断伏羲に注目が向けられており、地（修行）の階位を解明するためには、どちらの経論が正（主）であり、どちらの経論が傍（従）となるのかという問題が挙げられている。本稿で取り扱った成実涅槃師である法安の十地義（『大般涅槃経』、『華嚴経』）をはじめとして、地論文献P二九〇八における断惑義と四依義（『十地経論』『瓔珞経』）、三論文献の「十地断伏羲」（『菩薩地持経』、『十地経論』、『瓔珞経』）もまた、『天台宗未決』に先行する断伏羲となる。南朝文献羽二七一『義記』の「中寺法安解十地義」は中国仏教教学史上において重要な意義を有していると思われる、今後も地論文献や三論文献などを精査・比較し、行位解釈以外の浄土や法身などについて考察したい。

1 現存している『大般涅槃経集解』の内容に対して、菅野博士氏の論考があるが、これは一部の人師、例えば道生・僧亮・僧宗の教学の一部のみを考察したものである。諸人師の教学の全体像は解明されていなかった。また、南朝時期に中国で成立した經典と、それらの經典と同時に平行に形成された教学については、あまり研究されていなかった分野である。文献が散逸しているため、南朝における成実、毘曇の教学研究

はほぼ不明の状態である。

2 先行研究としての論文は次を参照。青木隆「一九九二」「天台行位説の形成に関する考察―地論宗説と比較して」（三崎良周編『日本中国仏教思想とその展開』、山喜房仏書林）、三七―五四頁。青木隆「一九九三」「天台行位説に関する一、二問題」（『印度学仏教学研究』四（二）所収）。船山徹「二〇〇〇」「地論宗と南朝教学」（荒牧典俊編『北朝隋唐中国仏教思想史』所収、法蔵館）、一二三―一五三頁。FUNAYAMA Toru [2011] *Buddhist Theories of Bodhisattva Practice as Adopted by Daoists*, *Cahiers d'Extreme-Asie* (20), pp15-33.

3 菩提流支と勒那摩提によって、如来蔵や瑜伽唯識の諸文献が北地に伝えられ、その中でも『十地経論』（五〇八―五一）が訳出されると、両者の弟子から、この『十地経論』を根本所依の聖典とした一派が成立する。これは地論学派或いは地論宗と呼ばれるが、「学派」と「宗」のどちらであるかという問題について議論されてきたが、本稿では「学派」を採用している。先行研究は、金剛大学校仏教文化研究所編「二〇一〇」「地論思想の形成と変容」（国書刊行会）、同「二〇一七」「地論宗の研究」（国書刊行会）、青木隆など編「二〇一二」「蔵外地論宗文献集成」（金剛大学校仏教文化研究所）、同「二〇一三」「蔵外地論宗文献集成続集」（金剛大学校仏教文化研究所）などがある。

4 鳩摩羅什訳『中論』『十二門論』『百論』という三論を中心に研鑽している一派であり、隋の吉蔵（五四九―六二三）を大成者とされている。先行研究は、平井俊栄「一九七六」「中国般若思想史研究―吉蔵と三論学派」（春秋社）、平井俊栄監修「一九九〇」「三論教学の研究」（春秋社）、伊藤隆寿「二〇一八」「三論宗の基礎的研究」（大蔵出版）などがある。

5 武田科学振興財団杏雨書屋編、二〇〇九年『敦煌秘笈』目録冊を刊行してから、写本の影片集も続々と刊行した。羽二七一『義記』は二〇一一年に刊行された影片冊四に収録している。

6 先行研究としては、池田将則「二〇一三」「杏雨書屋所蔵敦煌文献『義記』（羽二七一）の基礎研究」（『敦煌学』16）、白田淳三「二〇一四」「擬南齊竟陵文宣王所持の『雜義記』残簡―『敦煌秘笈』羽二七一録文研究―」（龍谷大学『仏教文化研究所紀要』五二）、張文良「二〇一四」「南朝十地学の一側面―法安の十地義解釈を中心とする―」（『印度学仏教学研究』六二（二））、張凱「二〇一四」「中国南朝の法身思想に関する一考察―特に『敦煌秘笈』羽二七一『不知題仏経義記』をめぐる―」（『武蔵野大学人間科学研究室年報』三）、同「二〇一七」「日本杏雨書屋蔵羽二七一『義記』の涅槃思想」（『哲学門』三五輯）、同「二〇一八」「杏雨書屋蔵羽二七一『義記』の三宝思想」（『東アジア仏教研究』一六）などがある。管見の限り、『義記』の内容から、蕭子良と直接に関係がある証拠は確認できない。

7 羽二七一の講義内容に関しては、白田淳三「二〇一四」前掲書、張凱「二〇一四」前掲書に指摘があるが、『大般涅槃經集解』の題目を比較するため、本稿では再び提示する。

8 写本は「皇興道明」と写しているが、「興皇道明」である。

9 『統高僧伝』…釈智藏。前略…年十六代宋明帝出家。以泰初六年勅住興皇寺。事師上定林寺僧遠僧祐天安寺弘宗。…中略…聖僧宝誌遷神、窈窕于鍾阜。於墓前建塔、寺名開善、勅藏居之。（大正五〇・四六五下—四六六上）。つまり、智藏が年少時代天安寺に居していたが、後に勅命によって開善寺に移居したのである。

10 齊永明七年十月、文宣王招集京師碩学名僧五百余人。請定林僧柔法師謝寺慧次法師、於普弘寺迭講。（大正五五・七八上）。

11 抄成実論九卷（齊武帝永明七年十二月竟陵文宣王請定林上寺釈僧柔小莊嚴寺釈慧次等於普弘寺共抄出）。（大正五五・三八上）。

12 先行研究は、菅野博士「一九八六」「大般涅槃經集解」の基礎的研究」（『東洋文化』六）、同「一九八五」「大般涅槃經集解」における道生注」（『日本仏教文化研究論集』五）、同「一九八六」「大般涅槃經集解」における僧亮の教判思想」（『印度学仏教学研究』三五（二））、同「一九八七」「大般涅槃經集解」における僧亮の感応思想」（『東方』三）、同「一九八八」「大般涅槃經集解」における僧宗の教判思想」（『印度学仏教学研究』三七（一））があり、後に菅野博士「二〇一二」「南北朝・隋代の中国仏教思想研究」（大藏出版）に収録されている。

13 「皇帝為靈味寺釈宝亮師製義疏序」は「高僧伝」宝亮伝にも引用されている。「皇帝為靈味寺釈宝亮師製義疏序」は道生（三五五—四三四）、僧宗、法安など十師の各序とは全く別の文献である。

14 布施浩岳「一九七三」「涅槃宗の研究」（後篇）、国書刊行会）、二二三頁。

15 布施浩岳「一九七三」前掲書、二四四頁。

16 『高僧伝』によれば、「釈智秀…中略…以天監之初卒于冶城寺、春秋六十有三」（大正五〇・三八一上）と伝えられる。天監は梁武帝の年号であり、五〇二—五一九年となる。

17 布施浩岳「一九七三」前掲書、二四七頁。

18 青木隆など編「二〇一二」前掲書、二二—二八頁、序文を参照。

19 主な先行研究は崔鉉植氏によって整理されている。横超慧日「一九五八」「新出資料・四論玄義の初章中仮義」（『印度学仏教学研究』一三）、同「一九六三」「四論玄義の初章中仮義」（『岩井博士古稀記念論文集』）。伊藤隆寿「一九六九」「慧均『大乗四論玄義』について」（『印度学仏教学研究』一八（二））、同「一九七二」「大乗四論玄義」の構成と基本的立場」（『駒沢大学仏教学部論集』二）、同「一九七四a」「大乗四論玄義」逸文の整理」（『駒沢大学仏教学部論集』五）、同「一九七四b」「一九七五」「三論教学における初章中仮義（上）」・「同（中）」・「同（下）」（『駒沢大学仏教学部論集』三二・三三・三四）、同「二〇〇九」「大乗四論玄義記」に関する諸問題」（『駒沢大学仏教学部論集』四〇、

後に伊藤隆寿「二〇一八」『三論宗の基礎的研究』（大蔵出版）に収録。そのほか、崔鉉植「二〇〇八」『大乘四論玄義記』と百済仏教（『駒沢大学仏教学部論集』三九）、崔鉉植「二〇〇九」編『校勘 大乘四論玄義記』（仏光社）、同「二〇一〇」『大乘四論玄義記』と韓国古代仏教思想の再検討（山口弘江訳『東アジア仏教研究』八）。菅野博史「二〇一〇」『大乘四論玄義記』とその周辺（『印度学仏教学研究』五八（二））、同「二〇一〇a」『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第一大意」の分析（『創価大学人文論集』二四）、「二〇一〇b」『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第二釈名」の分析（『印度学仏教学研究』六一（一））、同「二〇一〇c」『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第三体相」の分析（『印度学仏教学研究』六二（一））、などがある。

20 初出は崔鉉植「二〇〇九」前掲書、二三頁である。後に崔鉉植「二〇一〇」前掲書（山口弘江訳『東アジア仏教研究』八）、七二頁に日本語訳を掲載している。

21 張文良「二〇一四」前掲書。

22 船山徹「二〇一九b」前掲書に詳しい。また、船山徹「一九九六」『疑経『梵網經』成立の諸問題』（『仏教史学研究』三九）には、僧宗、宝亮の三十心についての検討がある。

23 張文良「二〇一四」には、『勝鬘經』の説によると、見諦惑・思惟惑・無明住地惑はそれぞれ「学道凡夫」「有学聖人」「阿羅漢」の対治煩惱であると指摘されている。管見の限り、『勝鬘經』に類似する見解が見られなかった。真諦訳『仏性論』に「二由一惑者、即阿羅漢由無明住地故不淨。三由二惑者、謂見諦思惟、即有学聖凡夫学道。凡夫由見諦煩惱故不淨。有学聖人由思惟煩惱故不淨。」（大正三一・八〇七下）と述べている。しかし、法安（四五四—四九六）が『仏性論』（五四六以降訳）を参照した可能性はないはずである。

24 池田将則「二〇一七」『敦煌出土地論宗教理集成文獻スタイン六一三V第二章「經弁五住地煩惱義」にみられるアビダルマ教理について』（金剛大学校仏教文化研究所編『地論宗の研究』、三三三—三五六頁）を参照。

25 『勝鬘經』…煩惱有二種、何等為二。謂住地煩惱及起煩惱。住地有四種、何等為四。謂見一处住地、欲愛住地、色愛住地、有愛住地。此四種住地、生一切起煩惱。起者刹那心刹那相。世尊、心不相應無始無明住地。世尊、此四住地力、一切上煩惱依種、比無明住地、算数譬喩所不能及。（大正一一・二二〇上）。『勝鬘經』の煩惱論については、中村元「二〇〇三」『維摩經 勝鬘經』（東京書籍、一一九—一二〇頁）に詳しい。

26 『梵網經』『瓔珞經』と同じように中国で成立した經典であり、『仁王經』の成立時期は四五二年から三十年ほどの間と推測している。船山徹「一九九六」前掲書に詳しい。

27 方広錮編「一九九五」『藏外仏教文献』（第二輯）、宗教文化出版社。二九三―三五四頁。

28 南本『大般涅槃經』…善男子、仏性者所謂十力四無所畏大悲三念処。一切衆生悉有三種破煩惱故然後得見。一闡提等破一闡提。然後能得十力四無所畏大悲三念処。以是義故、我常宣說一切衆生悉有仏性。（大正一二・七七〇上）。

29 南本『大般涅槃經』…仏言、善男子。譬如色法、雖有青黃赤白之異、長短質像、盲者不見。雖復不見、亦不得言無青黃赤白、長短質像。何以故、盲雖不見、有目見故、仏性亦爾。一切衆生、雖不能見、十住菩薩見少分故、如來全見。十住菩薩、所見仏性、如夜見色。如來所見、如昼見色。善男子、譬如瞎者、見色不了。有善良医而為治目、以藥力故得了見。十住菩薩、亦復如是。雖見仏性不能明了、以首楞嚴三昧力、故能得明了。（大正一二・七六九下―七七〇上）。

30 四弁は四無礙智である。南本『大般涅槃經』によれば、法無礙、義無礙、辭無礙、樂說無礙という四つをさす。

31 仏駄跋陀羅訳『華嚴經』…菩薩摩訶薩智地有十、…中略…何等為十。一曰歡喜、二曰離垢、三曰明、四曰焰、五曰難勝、六曰現前、七日遠行、八曰不動、九曰善慧、十日法雲。（大正九・五四二下―五四三上）。

32 船山徹「二〇〇〇」前掲書。

33 宝亮曰。就文求義、此実為難。云何行階、法雲猶不知有仏性、方須仏説、乃得見耶。此謂住前卅心中。初十心者名十住也。第廿心名為十行。第卅心名十迴向。若使菩薩、雖無量劫修行苦行、不聞涅槃經者、信首五根、終不可立。信根立時、正第卅心也。（大正三七・四六二下）。船山徹氏は、宝亮の住前三十心説の直接の典拠は『瓔珞本業經』であつたと指摘している。船山徹「一九九六」前掲書、六七頁。

34 僧宗と宝亮の見解については、船山徹「二〇〇〇」前掲書、一三九頁を参照。

35 僧宗曰、聲聞以見諦為僊、思惟為細。菩薩以三界為僊、習氣為細。今六住終心、斷三界結尽。如須陀洹斷見諦尽也。七住始侵習氣如斯陀含侵思惟結也。宝亮曰。從初地訖六地。若一豪惑未尽已來。如須陀洹斷見諦惑尽。斯陀含斷欲界思惟六品結尽證果行向。但使欲界一豪惑未尽。猶名斯陀含。以未離欲界故也。（大正三七・四三六中―下）。

36 船山徹「二〇〇〇」前掲書、一三九を参照。

37 同注2。

38 本稿で扱う教理集成文献P二九〇八は北魏洛陽期に成立されたと指摘されている。具体的に地論北道派の文献であろうか、地論南道派の文献であろうか、詳細な検討が必要である。しかし、この文献より地論学派の教学が窺えることは確実である。本稿で言及しているP二一八三も同様である。

39十者教法。地者菩薩善根階級住処。…中略…菩薩在初地、始得善法味、心多歡喜故名歡喜地。第二地中、行十善道、離諸垢故名離垢地。第三地中、廣博多學、為衆說法、能作照明、故名明地。第四地中、布施持戒、多聞轉增、威德熾盛、故名炎地。第五地中、功德力盛、一切諸魔不能壞、故名離勝地。第六地中、障礙事已、諸菩薩道法、皆現在前、故名現前地。第七地中、去三界遠、近法王位、故名深遠地。第八地中、若天魔梵沙門婆羅門、無能動其願、故名不動地。第九地中、其慧轉明、調柔增上、故名善慧地。第十地中、菩薩於十方無量世界、能一時雨、法雨如劫燒已、普澍大雨、名法雲地。（大正二六・二三上）。

40觀世音白仏言、世尊、何故初地名歡喜地、乃至仏地名為仏地。仏告觀世音、出昇大義、得出世間、心勝妙歡喜故、初地名歡喜地。離一切細微犯戒故、第二地名離垢地。彼三昧開持、依無量智光明故、第三地名明地。以智火焰、燒諸煩惱、修習菩提分法故、第四地名炎地。彼方便修習諸菩提分法、艱難勤苦、而得自在故、第五地名離勝地。現前觀察諸行生、及多相思惟故、第六地名現前地。不斷無間無相思惟、遠入近清淨地故、第七地名遠行地。無相無開発相煩惱、不行不動故、第八地名不動地。一切種說法自在、得無過广大智故、第九地名善慧地。如虛空等過惡、以如大雲法身周遍覆故、第十地名法雲地。細微煩惱爾障斷、得無礙無障爾焰一切種覺故、第十一地名仏地。（大正一六・七一五上—中）。

41云何名歡喜地。出過凡夫、得不思議、出世間道、心生歡喜故名歡喜地。云何名為離垢地。離破戒垢故、名為離垢地。云何名明地、依十二門禪、得明智慧、故名為明地。云何名焰地。得增上覺意、分別道品、燒煩惱薪、功德熾然、故名焰地。云何名離勝地。修習十智、雖伏煩惱、未能勝故、名為離勝地。云何名現前地。能逆順觀十二因緣、得法現前故、名為現前地。云何名深遠地。愛仏功德、智慧次第、不間余心、深入法相、故名深遠地。云何名不動地。離色等相、堅固難動故、名為不動地。云何名善慧地。入四弁才、解一切音声、隨其所問、於一刹那頃、悉皆能答、故名善慧地。云何名法雲地。能受一切仏法、猶如大雲能注法雨、故名法雲地。是名菩薩具足十地。如是十地、是菩薩安住行處、亦能滿足一切智慧。如《十地經》中之所広説。（大正三一・四二下—四三上）。

42整理者は池田將則氏である。P 二九〇八の解題によれば、本文獻は北魏洛陽期における仏教教理学の実録であると推定されている。また、各章の論述内容には『大般涅槃經集解』に集成されている南朝『涅槃經』教理学の影響が顯著であると指摘されている。『藏外地論宗文獻集成』、一一四—一九頁。

43南本『涅槃經』…何等為四。有人出世具煩惱性、是名第一。須陀洹人・斯陀含人、是名第二。阿那含人、是名第三。阿羅漢人、是名第四。是四種人出現於世、能多利益憐愍世間、為世間依安樂人天。云何名為具煩惱性。…中略…是名凡夫非第八人。第八人者不名凡夫。名為菩薩不名為仏。第二人者名須陀洹斯陀含。…中略…如是之人未得第二第三住處、名為菩薩已得受記。第三人者名阿那含。…中略…已得受記不久得成阿耨多羅三藐三菩提。是則名為第三人也。第四人者名阿羅漢。阿羅漢者。斷諸煩惱捨於重担。逮得己利所作已辦。住第十地自在智。…後略。

（大正二・六三七上―下）。四依とは、人の四依と法の四依がある。法の四依とは、「依法不依人、依義不依語、依智不依識、依了義經不依不了義經。如是四法应当証知、非四種人」（大正二・六四二上）の四法である。

44 鳩摩羅什訳『十住經』…是菩薩摩訶薩得歡喜地。所有諸怖畏即皆遠離。所謂不活畏、惡名畏、死畏、墮惡道畏、大衆威德畏、離如是等一切諸畏。（大正一〇・五〇〇下）。要するに、『十地經論』が伝入する前、羅什訳『十住經』は既に五種の怖畏が説かれている。

45 第一曰歡喜。以初登聖境、始出凡界、恃欣所遇、故以為名。（羽二七一・一一）。

46 第二曰離垢。十惡垢也。大判三品。初地除上、二地除中、所去已多、故受「離」名。第三曰明。得十二門禪故、心解慮靜。心解慮靜故、初忍滿足。心靜解足故、以「明」為名也。

47 『十地經論』…經曰、菩薩如是十種逆順觀因緣集法、所謂因緣分次第故、一心所攝故、自業成故、不相捨離故、三道不斷故、觀先後際故、三苦集故、因緣生故、因緣生滅縛故、隨順有尽觀故。論曰、…後略。（大正二六・一七〇下）。

48 『大智度論』…地有二種。一者但菩薩地。二者共地。共地者、所謂乾慧地乃至仏地。但菩薩地者、歡喜地、離垢地、有光地、增曜地、難勝地、現在地、深入地、不動地、善根地、法雲地。此地相、如『十地經』中広説。（大正二五・四一一上―中）。

49 取は「趣」の通仮ではないかと指摘されている。『藏外地論宗文獻集成』、一三〇頁、注四八。

50 第は「諦」の通仮ではないかと考えられる。

51 「中寺法安解十地義」…無生忍下品為八地、中品為九地、上品為十地。（羽二七一・一一）。

52 船山徹「二〇一九b」前掲書、第五章「聖者になる修行」に詳しい。

53 淨影寺慧遠撰『大乘義章』…約就三界二輪煩惱。弁其三根三道三毒差別之相。先弁三根。若依毘曇。三不善根。唯在欲界。非上二界。上二界中。無不善故。就欲界中。通説見修二輪煩惱為不善根。同能發起不善思故。若依成実。三不善根亦在欲界。非上二界（大正四四・五六五中）。

二輪煩惱とは見道（見諦惑）・修道（思惟惑）の煩惱であると考えられる。

54 自住前心謂之凡夫。凡夫有二種。初十心以前為外凡夫。第廿心為種性地。第卅心為解行地。此二地通為内凡夫也。（羽二七一・一〇）。

55 『藏外地論宗文獻集成』、一一四頁、P二九〇八の解題を参照。

56 解斷伏義。…中略…又伏義不同、有二家之説。一者三十心伏三途之惑。信忍正斷三途、兼伏思惟及三途之習。順忍正斷思惟及三途之習、伏思惟習氣、兼伏色心無知。七地正斷思惟之習、兼伏色心集起。八地已上、唯斷而不伏。三途復有三階。初十心伏於地獄、中十心伏於畜生、後十心伏於鬼道。信忍亦三品。初地正斷地獄、伏思惟潤欲界人天之惑、兼伏地獄習氣。二地正斷畜生、伏思惟色界之惑、兼伏畜生習氣。三地正

断鬼道、伏思惟無色之惑、兼伏鬼道習氣。順忍有三品。四地正断欲界人天思惟之惑及地獄習氣、兼伏三界思惟之習氣。五地正断色界思惟之惑及畜生習氣、伏色塵無知。六地正断無色界思惟、餓鬼習氣、兼伏心塵無知。七地並断思惟三品之習、伏色心集起無知。八地正断色塵無知。九地断心塵無知、十地断色心集起無知。〔藏外地論宗文獻集成〕・九八—一〇二頁。

57 崔鉉植「二〇〇九」前掲書、二六—二七頁。同文の日本語版は崔鉉植「二〇一〇」前掲書（山口弘江訳）、七五頁を参照。

58 『成実論』「四諦品第十七」…上罪地獄、中罪畜生、下罪餓鬼。上善天道、中善人道、下善阿修羅。（大正三二・二五一上）。

59 『勝鬘經』無明住地其力最大。…中略…其力最勝…阿羅漢辟支仏智所不能断、唯如来菩提智之所能断。（大正一一・二二〇上）。

60 『菩薩瓔珞本業經』…歡喜地…中略…三賢菩薩伏三界煩惱龜業道龜相統果、亦不起龜。…後略。（大正二四・一〇一六上—中）。

61 『大乘四論玄義記』は直前の箇所次のように述べている。「莊嚴家云。十住論云、初地見惑尽者、此意正言能断見諦、不言都尽也。如須陀洹得見諦惑尽必至涅槃。以譬初地生仏家、故生歡喜。少分為喻、不言初地見諦都尽也。如十住論中、亦以初地已断三界思惟。可令初地思惟都尽耶。故知言断（見）諦縛而未尽也。又云別相与無知有別故、習氣必龜、無知必細。龜則先除、細則後断。八地以上、正断無知。則知習氣於七地中尽也。」（『大乘四論玄義記』・二七〇頁）。これとの関連を考えると、『十地論』が『十住論』ではないかと考えられる。また、三一六頁に「又大論第四十九云、引十地名竟云、如十住論中說。此十住論、傳云、是龍樹論別有十住論、非天親十住論也」と述べている。この『十住論』は龍樹造『十住毘婆娑論』であろう。

62 出典未詳。『大乘四論玄義記』の別の箇所に次の文がある。「依『瓔珞經』云、初地断見諦惑煩惱、二地断人中煩惱、三地断天上煩惱、四地断三禪以下煩惱、五地断三宝（空）以下煩惱、六地断非相非非相煩惱者、例前可知。七地以上、金剛心以下、断恒沙等煩惱、亦是可尋也。」（『大乘四論玄義記』、三一七頁）。この箇所も『瓔珞經』に依拠したことを示しているが、詳しく検討する必要がある。

63 小莊嚴は小莊嚴寺の法師を指すが、特定できない。『大乘四論玄義記』の用例としては、「小莊嚴榮法師云、龍光伝開善云」が見られるため、小莊嚴は慧榮法師であろう。『統高僧伝』・大正五〇・四八七下—四八八上を参照。小莊嚴寺法師も、龍光寺法師も、開善寺智藏（四八五—五二二）より後の僧である。南朝寺院に関しては、杜潔祥編「一九八〇」（清・孫文川撰、清・陳作霖編）『南朝仏寺考』（『中国仏寺史志彙刊』第一輯第二冊、明文書局）を参照。

64 龍光は龍光寺の法師を指すが、特定できない。用例としては、「龍光綽師伝述開善云」（『大乘四論玄義記』・三二五頁）と「又聽龍光綽師成実」（『統高僧伝』・大正五〇・四九四中）が見られる。

65 『本業經』与『持地經』明十地義、最分明。又『十地經』与『十住經』『本業瓔珞經』『仁王經』等、悉并十地也。（『大乘四論玄義記』・二

八六頁）。

66 『天台宗未決』…最澄在唐日間、遼座主決義。（『卍新纂統藏經』五六・六七一下）。在唐中の最澄（七六七―八二三）の疑問に対する龍興寺道邃が答えた問答集（八〇五年に行った）である。また、『天台宗未決鈔』・『天台宗未決問答』・『在唐十問答』などとも称されている。後に『光定疑問 宗顯決答』や『円澄疑問 広修決答』などのほかの日本僧と中国僧の間に行われた問答集六篇を含めて、『唐決集』（合計七篇）に収録されている。『唐決集』については、一六二六（寛永三）年の刊本が現存している。先行研究としては、西岡虎之助「一九二五」「唐決について」（『史学』四（一））、唐決研究会「二〇〇九」「唐決」―日本における天台学受容過程の研究（一）」（『大正大学総合仏教研究所年報』三一）、同「二〇一四」・「二〇一五」・「二〇一六」・「二〇一七」・「二〇一八」「唐決「広修決答」と「維錫決答」の比較研究」（一）・（二）・（三）・（四）・（五）（『大正大学総合仏教研究所』三六・三七・三八・三九・四〇）が知られる。

略号

- 一、大正―『大正新脩大藏經』
- 二、『勝鬘經』―『勝鬘師子吼一乘大方便方広經』
- 三、『華嚴經』―『大方広仏華嚴經』
- 四、『般若經』―『摩訶般若波羅蜜經』
- 五、『梵網經』―『梵網經盧舍那仏説菩薩心地戒本第十』
- 六、P―フランス国立図書館蔵ペリオコレクション本
- 七、S―大英図書館蔵スタインコレクション本

（キーワード）十地、修行階位、成実涅槃、地論、三論

（博士後期課程）